

『ラ・ボエーム』最終場面の秘密

——非整数次倍音による台詞の効果について——

情報工学科 2年 K. S.

「ラ・ボエーム」の最後、演者が突然普通の話し方に戻ったときのあの緊張感がどうしても頭から離れなかった。

ムゼッタからマフを受け取ったミミは、ロドルフォからの贈り物と勘違いする。正気であれば、マフを用意したのはずっとそばに居たロドルフォではないことは分かるが、ミミの意識が薄れ、最期が近いことを暗示している。ロドルフォたちもそのことに気付いているが、自分に言い聞かせるようにミミが生き永らえると信じようとしていた。黙ってミミのそばに座るしかない自分と、その背中にかけてられる感謝の言葉に、ロドルフォは自分の無力さを呪ったことだろう。

泣いてるの？

わたしは大丈夫よ

どうして泣くの？

どうして？

愛しい方

わたしは そばにいるわ

ほら 手が—

温かくなった

これで—

眠れるわ

ミミの最後の唄にはロドルフォへの愛が詰まっている。寝たきりの自分に寄り添っているのはロドルフォの方なのだが「大丈夫よ」「そばにいるわ」と、朦朧とした意識の中にもロドルフォを気遣い、安心させようと勤める。そして第一幕の歌にある、ミミの“冷たくてかわいい手”はついにマフによって温められ、まさに眠るように息を引き取った。“僕に温めさせて下さい”の歌詞通り、最後はマフではなくロドルフォの手で温めて欲しかったが、マフはこの結末において重要な役割を果たしている。ミミのささやかな最後の願いであり、手を温めることすら叶わないロドルフォの無力感を強く表している。死の前に人は本当に無力だ。ロドルフォたちは本当に眠ったと思い、ミミが逝ったことに気付かない。そしてムゼッタの祈るような唄のあと、ショナールがミミの死に気付く、コルリーネが帰ってきてからが問題の場面である。

どうだ？

あの通り落ち着いてる

君たち どうした？

なぜ僕を見る？

気を確かに！

初めてこの場面を見たときは本当に衝撃的であった。普通に話すことにここまで意味を持たせることが出来るとは思わなかった。ここである考えが浮かんだ。この効果は「倍音」にあるのではないだろうか。偶然にも最近「倍音」（中村 明一著）という本を読んでいた。音には基音と倍音によって構成され、さらに倍音は「整数次倍音」と「非整数次倍音」に分けられる。ハーモニーを重視する西洋の楽器には低次の整数次倍音と基音が多く含まれ、オペラ歌手の歌声は倍音がほとんど含まれておらず基音が強い。それまで歌が続いて非整数次倍音がほとんど無かった状態から、重要性を直接心に語りかける非整数次倍音が多く含まれる話し声になったことで、加えて西洋人より非整数次倍音を聴くことに長けているらしい日本人には、この演出はかなり効果的なものになっていると思う。もっとも、読み始めたばかりでまだ詳しくもなく、聞き分けることも出来ないので飽くまで憶測であるが、この感動的な場面には物理的な裏づけがあったに違いないと考える。